慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中村洸先生のご逝去を悼む
Sub Title	
Author	栗林, 忠男(Kuribayashi, Tadao)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2007
Jtitle	法學研究 : 法律・ 政治・ 社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.80, No.10 (2007. 10) ,p.131- 132
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事 : 中村洸先生追悼記事
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20071028-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中村洸先生のご逝去を悼む

本年（平成一九年）二月一一日に元法学部教授、慶應義塾大学名誉教授の中村洸先生が逝去された。享年七九歳であった。先生は長年にわたって膠原病を患っておられたせいか、鶴のような痩身が痛々しく映ることが多かった。それでも、いつも紺のダブル服を着用され、ダンディーな姿を失わない方であった。昨年暮れに先生から突然電話を頂戴し、慶應病院に入院されたことを知って驚いた。例年のご自宅への年初のご挨拶に伺う機会を楽しみにしていた矢先であった。駆けつけた私に、「慶應はいろいろ親切にしてくれるので有難いよ」と話されたり、肺に癌が転移したことなど綿密に病状の説明をして頂いたりして、その時はとてもお元気な様子であった。その二カ月後に先生は還らぬ人となった。誠に痛恨の極みである。

中村先生は当初は国際法の中でも条約法の分野などを研究されていたが、次第に海洋法の研究に専念されるようになった。それは、一九六〇年代から激動し始めた国際海洋法の変革の時期と符合する。先生の研究手法は関連文献を人一倍丹念に渉猟し、緻密で手堅い議論を展開した。領域問題や漁業問題などは特に先生の得意とされた分野であり、関連の業績も多い。学界に対するその功績は誰もが認めるところである。先生は海外で開催される国際学会や国際会議等における活動よりも、研究室や書斎の中での研究生活を好まれた方であった。私の知る限り、先生は慶應義塾派遣留学生としてロンドン・ジュネーブなどに一年間を過ごした以外はほとんど国外に出ることはなかった。それでいながら、綿密な情報収集を通じて国際法全般や海洋法の最新の動向を正確に把握することを怠らなかった。晩年における先生の研究活動は、国家管轄権の範囲を超える「深海底」に関する国際法問題に集中していた。大手の法律関係出版社が、一九八二年に国連で採択された「海洋法に関する国際連合条約」（国連海洋法条約）のコンメンタール書を作成することを企画し、その執筆依頼を受けていたからである。上巻と下巻は既に別の執筆者達によりかなり以前に出版されており、深海底問題に関する中巻を担当された先生は、

国連海洋法条約採択後に行われた深海底に関する条約部分の大幅な改正などもあって、改正に関わる膨大な新しい文献・資料等の分析に手間取り、ついに最後まで完成するには至らなかった。先生には何度も早期の脱稿を勧めたが、先生は頑として首を縦に振らなかった。そういう一徹な面があった。

先生はご自分のことをあまり話されない方だったので、四〇年間ご厚誼を頂いたにも拘わらず、先生のことについては知らないことが多い。ただ、先生のご家系が福沢諭吉出身の中津藩の藩士であることは、早くから伺っていた。先生は、ご自分のことをあまり仰らないだけでなく、他人のことも詮索されたり口出しされたりしない方であったので、大学の内外で好き勝手な行動をしていた私のような後輩達にとっては、有難いことであった。定年退職後は、田園調布にあるご自宅の庭の芝生の手入れ、近所の多摩川での鯉釣り、愛犬の飼育などが先生のご趣味といえるもので、あとは学究に明け暮れた静かな毎日であったと思う。しかし、お子様のいない先生は、奥様が十数年前に難病で長期入院されてから以後は、急速に元気がなくなられたような気がする。

時に「気難しい」と評されることもあった先生の多くの言動の根底には、実は独立不羈の確固たる姿勢があることを、私は先生のご存命中に少しずつ気がついていた。無宗教で焼香も葬儀も行わずにひっそりと逝かれた先生は、最後までその姿勢を貫かれたのではないかと思っている。

名誉教授　栗　林　忠　男